

精神科だより

記 精神科 精神・環境医学診療部長 藤本 明
放射線科 医長 長谷川 明

精神疾患への取り組み

現在、精神科は外来だけで診療しております。そのため重症な患者さまをじっくり治療したり、救急対応することはできなくなっております。しかし、総合病院という特色を生かしてなんとか地域の皆さまのお役に立ちたいと努めております。

精神科も最近、時代の影響を強く受けるようになっております。一番の問題は、地域で支える力がずいぶん弱くなっているように思うのです。精神科の治療は単に薬物だけではありません。基本的には脳の病気ではあるのですが、人に支えられることが間接的であったとしても大きな治療の手段になるのです。それが今、弱まっていることが心配でなりません。

では、今取り組んでいることを具体的に述べてみます。



アルコール依存症

これは私が勤務地として岩国を選んだ大きな理由でした。「閉ざされた環境の中で強制的に酒をやめさせるのではなく、自由な環境のもと、患者の自由意志で断酒して新生することを援助したい」、そう思って岩国に赴任しました。

現在、精神科病棟はなくなりましたが、アルコール外来は続けております。以前ほど活発ではなくても何とか維持しております。立ち直っていく患者さまの笑顔を見ることは大きな楽しみです。

しかし、この疾患も時代の影響を強く受けるようになりました。単身者が多いために外来受診をする数が落ち込み、実情が見えにくくなっているようです。この疾患数が減っているというより、援助者がいないために病院に行きにくくなっているように思います。治療のシステムとして確立された「断酒」、「自助組織*1参加」という公式を維持するのだけでも大変な時代になっているように思います。なんとかこのシステムを守りたいと思うこのごろです。



*1 自助組織 … 同じ困難や問題、悩みを持った者同士が励まし、協力しあいながら問題を克服しようとする組織。

うつ病

この疾患も現在、混乱期に入っております。抗うつ薬の安易な使用に警鐘が鳴らされ、また、抗うつ薬の副作用も問題になってきております。

うつ病の中でも当科がかかわってきたのは女性の産後のうつ病です。「抗うつ薬が効きにくい」、「長期化しやすい」、「症状が非定形で治療に反応しにくい」という特徴があります。産後うつ病の場合は育児をしばらく休んでいただくことが絶対に必要なのですが、本人も家族もなかなか受け入れません。薬物以外に本人・家族への教育、育児の肩代わりなどが有効だと思えます。



終末期医療

これも現在、総合病院精神科に期待されている部門です。終末をもがき苦しむのではなく、安らかに送ってもらうように援助しております。患者さまに付き添うことで、我々もいろいろ学ばせてもらっております。

終末は必ず訪れるものだけに決して他人事とは思えません。今、問題に感じるのは日本人が“霊的な支え”を失っているように思われることです。誰がこの霊的な支えをどのように与えるかで日々悩んでおります。

適応障害

若い方がよく来られます。以前と比べて会社は家庭ではなくなっているようです。すいぶん職場でつらい体験をしているようです。時代が変わり、助けてくれる上司、先輩が居なくなっているようです。会社ぐるみで復職を援助するという傾向もすいぶん少なくなりました。この患者さまと接して思うことは、「若い人をもっと大切にしないと日本の将来はないのではないか」ということです。

治療としては主に抗うつ薬を使うことが多いのですが、自尊心を失い、将来への希望を失っている人が多いので、自己評価を取り戻すように精神的な支持をしたり、職場と交渉したりして復職を援助しております。



認知症

怖い病気です。原因は老化です。80歳を過ぎると4人に1人はこの病気にかかると言われております。当科では放射線診断が充実しているために正確な診断ができますが、まだ治療は“治癒（完治）”ではなくて“進行を遅らせる”という状態にとどまっております。したがって、治療の主体はケアに尽きると思います。家族をどう支えるかが大事な治療の方法かと思えます。

認知症の放射線診断

■これまでの診断■

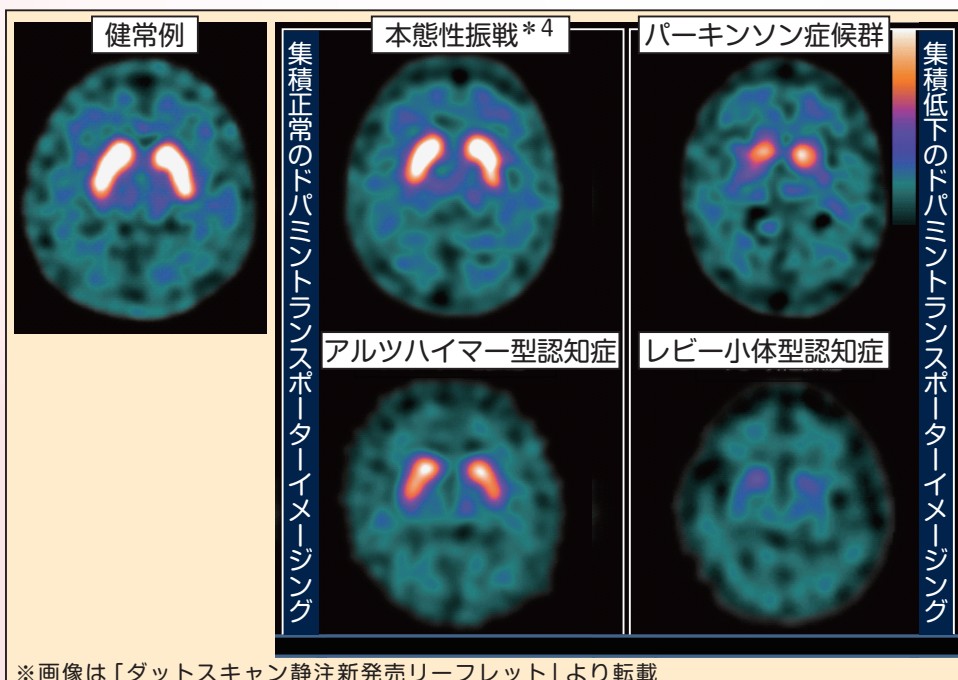
CTやMRIなど脳の形態を見る検査や、脳の中でどの部分の血流が低下しているかをみる核医学検査が行われ、臨床症状や神経学的検査とあわせることによって、数あるうちのどのタイプの認知症かを判断していました。

■新たな検査薬『ダットスキャン』■

本年1月27日から、このような検査に加えて新たな核医学のための検査薬が発売されることになりました。この薬、ダットスキャンは認知症を示す疾患の中で最も多いアルツハイマー型認知症*²と、最近多いことが分かってきたレビー小体型認知症*³とを区別できることが期待されています。また全く別の疾患で、手足の震えや動作が遅くなったり少なくなったりするなど体の動きが悪くなり、進行期には認知症を示すことのある、パーキンソン症候群などを正確に診断するのにも用いることができます。

検査は約2mlの検査薬を静脈注射し、3時間ほど病院で休んでもらった後、30-40分ほどかけて脳の画像を撮影いたします（【図1】参照）。この検査を行うことにより、認知症診断に対して、これまでもまして診断精度向上に貢献できるものと思えます。

現在、当院でもこの検査を行うことができるよう準備を整えておりますので、ご期待ください。



*² アルツハイマー型認知症
脳内で特殊なタンパク質異常が起こり、脳内の神経細胞がどんどん壊れ、脳が次第に萎縮していき、知能、身体全体の機能が衰えていく。

*³ レビー小体型認知症
初期に幻覚（特に幻視）や妄想が出てくる。そのうち、物忘れなど認知症の症状が現れ、さらに体が硬くなる、動作が遅くなる、小ままたで歩くなど、パーキンソン病に似た運動障害が出てくる。

ほんたいせいしんせん
*⁴ 本態性振戦
自分の意思に反して手や足などが震える。

※画像は「ダットスキャン静注新発売リーフレット」より転載

【図1】ダットスキャンによるイメージング